「本当の私」なんてあるのか

『バカの壁』養老孟司（ようろうたけし）氏が講演

ハローワークの事務所にこんな垂れ幕がかかっていた。
《自分に合った仕事が見つかるかもしれない》
ふと目にとめて、養老孟司先生は、
「役所までアタマがおかしくなったのか」と暗澹とされたそうである。
ベストセラー『バカの壁』で著名な解剖学の東大名誉教授。
10月8日、多摩キャンパスで開かれた講演を誌上再現しよう。

【学生記者】猪瀬智巳（商学部2年）

ハローワークの標語は、「本当の自分がある」ということを前提にしている。一体、「本当の自分とは、果たして自分にわかるのだろうか」と養老氏は言うのだ。「仕事というのは、世の中に必要とされているから存在するのであって、自分に合っているかどうかとは関係ない」

いきなり、「常識の壁」をひきはがすような問いかけである。

クレセントホールは２０００人を越える聴衆でほぼ満席。マイクを手に、右左歩きながらの講義スタイルで話が進んだ。

◆「個性を伸ばす」というナンセンス　養老氏は学生にこのようなことを言う。「誰もお前と隣の人を間違えないぞ」。人の体や遺伝子はみんなそれぞれ違っている。それが「個性」なのだ。個性とは、体の中にあるものだ、といえる。体は生まれたときからある。「個性を伸ばす」というけれど、はじめからあるものをどうやって伸ばすというのか。

個性は、脳、感情、心にあるという考えはウソだ。そんなところにあっては困る。算数の答えに個性はない。みんな同じ答えにならなければ困る。感情は共感以外は意味がない。他人の気持ちがわからなければ困るのだ。

心は人間に共通するものである。だから、心に個性がないのは、当たり前のことだ。心は通じ合わせるものであり、お互いで理解しあおうとするものなのだ。思い出してほしい。戦争中、日本国民は「欲しがりません、勝つまでは」の精神で心をひとつにしていた。

精神病院に自分の便で名前を書く患者がいた。そこで、この患者のことを理解しようとしたが、できなかった。でも、できなくていいのだ。もし理解できていたら、自分も精神病院送りである。脳や心に個性があると考えるならば、この患者の行動は個性だということになってしまう。それはおかしい。

◆美人は普通顔　「美人をきめるのは自分の感性だが」と、これは痛快な話。１００人の人の顔をどんどん重ねていくと美人になった、そうである。

１００人もの顔を重ねていくとその顔は平均的な顔に近づき、私たちの感性は、平均値に近くなるほど反応する。つまり美人とは、世にもまれな顔ではなく、「普通の顔」。生物が、世にもまれなものではなく普通なものに反応する力を持っているのは、実に合理的なことである。なぜなら、世の中には普通なものの方が多いからだ。

◆知識より「方法」学べ　学生たちは自分探しの旅に出る。それは「本当の私とは何だ？」と考えるからだ。大学で身につけるべきものは知識よりもむしろ「方法」である、と養老氏は力説する。

解剖学教室では学生たちに直に解剖をやらせる。それは体の中がどうなっているのかという知識を身につけさせるためではない、と言う。「学生はそこから自分自身で何かをつかみとらなければならない。何をつかみとるかは学生次第だ」と。

物質として最も安定しているものは何か？　不意打ちのように語りかけて、「それは死体である」と解剖学者は言うのである。

生きている人の中で、去年と同じ髪の毛、皮膚、細胞を持っている人はいない。人間の体は1年たつと9割以上変わってしまう、のだそうだ。

◆たとえば、『方丈記』　＜ゆく河のながれは絶えずしてしかももとの水にあらず。澱みに浮かぶうたかたはかつ消えかつ結びてひさしく留まりたるためしなし＞

鴨長明の『方丈記』の冒頭である。

河は安定しているように見える。しかし絶えず変わっている。私たちも同じなのだ。今の若い人たちが、自分たちを河だと思っていないのはおかしい。

「でもしか」先生の登場で教師の価値が下がった。それに伴って教育の意味が不明になった。「本当の私」にこそ価値があると考え、「本当の私」は変わらない、と教える。変わるのではなく、「付く」と考える。本当の自分のまわりに付録のようにいろんなものを付けるのが、教育だと。でも人が変わらないのなら、教育は何のためにあるのか。大学に来て、自分は変わる、と思っている学生はどれくらいいるだろうか。

本当の自分が存在するなら、おそらくそれはどんな職業を選んだって変わらないものであろう。しかし、実際人は変わる。

「だから」と養老氏は言う。「結局は本当の自分なんていないと言えるのではないか」

◆西洋的な「自己」　本当の自分がある、という考え方は西洋から来たものである、と話が進む。

キリスト教やユダヤ教には旧約聖書がある。そこに、人間が裁きを受ける「最後の審判」の話がある。仮に、自分はアルツハイマーになって死んだとしよう。そうすると、神様の前に出て最後の審判を受けるのは、アルツハイマーの自分なのか、それとも、それになる前の元気な自分なのか判断できない。そこで、統一された自分というのが必要になってきた。これが、本当の自分は変わらない、という考え方のもとになっている。

あるとき、小説を書いている人が「解剖を見たい」と言ってきた。しかし同時に迷ってもいた。見たいのだが、それを見ることで感性が変わり、いま書いている小説に影響が出てきてしまうのではないかと。そう、「人はコロコロ変わってしまう」ものなのだ。

人が変わるきっかけには「知る」という行為がある。知るということはガンの告知に似ている。たとえば、自分がガンで、あと半年の命だと告げられたとする。そうすると昨日まで見ていた桜が違って見える。昨日まではどんな風に見ていたのか、思いだせない。このとき自分は、残りの命が少ないということを知って変わったのだ。一度変わったら、もとの自分には戻れない。

本当の自分がある、と考えたいのは、今の自分を殺したくないからである。新しい自分は以前の自分が死ぬことによって生まれてくる。でも、以前の自分からしてみれば死にたくないという思いがある。本当の自分があると死ぬのが怖くなってしまう。

NHKのアナウンサーにこんな質問をされたそうだ。「死ぬのをどう思いますか？」「私が死ぬんじゃない。どっかのジジイが死ぬんだ」。アナウンサーは不思議そうな顔をしていた。

こんな話を披露しながら、養老氏はニコニコ笑っていらっしゃる。

◆「変わる私」ゆえに　自分がどんどん変わっていっても、ひとつのことをやり続けることはできる。むしろ変わっていくから、ひとつのことをやり続けられるのだ。

閑話休題――。イソップ物語、アリとキリギリスの今の若者版。

アリは夏の間せっせと働いて、寒い冬に備えるために食べ物をたくわえていた。一方で、キリギリスは毎日遊んでいた。そして、冬がやってきた。夏の間一生懸命働いていたアリは過労で死んでしまった。遊んでいたキリギリスはアリのたくわえた食べ物を食べて生き延びたのだった。

――ときにケムに巻くような、したたか「脳」を刺激するお話。ものの見方、考え方特講の趣があった。